

座談会

英語で世界とつながる



さまざまな分野でグローバル化が進む中、国際共通語といえる英語を身に付け、使うことの重要性は高まるばかり。小学校で外国語活動を導入するなど国や教育現場も対策を講じてきたが、その成果はあまり得られていないようだ。これからの英語の学び方やコミュニケーション力の向上法などについて、英語を武器に国際社会で活躍してきた方々が自身の経験を踏まえ語り合った。司会は西日本新聞社社長の川崎隆生。



日本英語交流連盟会長
沼田 貞昭氏

高校3年時に米国留学。東京大学法学部卒。オックスフォード大学修士。1966年外務省に入省し、在英特命全権公使、外務報道官、カナダ特命全権大使などを歴任(72～82年歴代総理の英語通訳)。2011年から現職。東京都出身。



西南学院大学教授
野田 順康氏

北海道大学修士修了。九州大学博士修了。博士(人間環境学)。1979年旧国土庁入庁。国連人道問題局専門官、国連人間居住計画アジア太平洋地域本部長など通算15年間の国連勤務(ジュネーブ、ナイロビなど)を経験。2013年から現職。京都府出身。



西日本シティ銀行会長
久保田 勇夫氏

東京大学法学部卒。オックスフォード大学経済学修士。1966年旧大蔵省に入省し、大臣官房審議官、国際金融局次長、関税局長などを歴任。日米交渉をはじめ多くの国際金融交渉や大蔵大臣の通訳を手掛ける。2014年から現職。福岡県出身。

歴史を勉強し 日本をもっとよく知ろう

基本的学び

川崎 皆さんは英語を駆使して素晴らしいキャリアを重ねてこられました。ご自身の英語力が上がったと感じたのはお幾つ頃でどんな勉強をされたのですか。

久保田 最初に英語が上達したと実感したのは中学1年の夏休み。1学期に習ったところを毎日10回音読して10回ノートに書くことを40日間続けました。英語では誰にも負けない

英語を学び、人を育てる

交流し磨く

川崎 一般的に日本人は英語が不得手だとよくいわれています。どうすればいいとお考えですか。

久保田 やはり留学は大きな訓練になるのでは。留学先のオックスフォード大学では、当時、昼食と夕飯は皆そろって食べるのが決まり。周りに座っている仲間と時にはジョークも交えながら食事をする。これを年間続けたら、どこでどういふ言い方をすればいいのかわ

—— デイベートで論理的思考と議論の鍛錬

沼田 留学した米国の高校では、週に1度、与えられたテーマに沿って500語のエッセイを書くことが課せられました。オックスフォード大学でも週に2度、数千語の論文を書くという経験をして、書くトレーニングを積み重ねたことでかなり力が付きました。英語では、とくに英会話といわれますが、まず書くことが大事だと思います。

野田 国連での仕事は全て英語。自分のボキャブラリーで書き表現する

—— 自分を外国に置けるのと 同じ環境に置く

沼田 チャンスがあれは海外に出たいですね。英語教育自体は必ずしも小学校からする必要はないと考えています。中学くらいから高校くらいまでの間に年に数週間外国に行き、外国人と接しているという議論する経験を持ち、さらに大学で1年くらいその機会があると随分違います。

川崎 最近、若者の留学志向がなくなったと耳にしますが、大学の教

外向きの意識

川崎 諸外国と日本では外国語、特に英語の教え方に差があるのでしようか。

野田 韓国や中国などではオーラル(話す、聞く)に重点を置いた英語教育を取り組み、結果を出しています。日本は恥じらいの文化があり、コミュニケーション力が弱いのは確かです。まず話す姿勢から変えないと英語教育も難しいでしょう。第一歩として、中小学校の時代に、日本語でもよいか自分の意見をみんなの前で大きな声で発言できるように

野田 最後の最後は、どこまでリスニングコンプリケーション(聴解力)の技量があるか。それによりネイティブインクも強くなっていくのだと思います。

久保田 言葉には品格が表れるもの。また単語だけで話すのではなくフレーズで話すことを心掛けてほしい。もう一つは、例えば国際線のパイロットが操る英語のように明快で誰にでも通じる英語で話すこと。それに国際的レベルで通用するためには、日本のことをよく知っておくことも重要だ。食事会や会議の間でも、必ずあなたの国はどんなのだ、それはなぜだという話題になります。一番弱いのは歴史だと思います。日本の歴史についてももう少し勉強をしていただきたいですね。